

宣教師として来日前後の スタークウェザー (Alice Jeannette Starkweather) 関連記事 (1875-1877)

—*The Pacific* を中心に—

坂本 清音

はじめに

筆者は *The Pacific* のバックナンバーのデータを 2009 年に入手して以来、スタークウェザー関連の記事を執筆する際に、適宜利用してきた⁽¹⁾。しかし今回は、彼女が宣教のために日本へ渡ってきた時代に的を絞り、項目を選んで出来るだけ詳しく紹介したい。また、これまでは主として宣教師文書⁽²⁾ やウーマンズ・ボード⁽³⁾ の機関誌 *Life and Light for Woman* (以後 *L&L* と略す) の記事を中心に、スタークウェザーの記事紹介および考察をして来たが、*The Pacific* の入念な読み込みにより Woman's Board of Missions of the Pacific (以後 WBMP と略す) の歴史にとって、同紙の果たす役割が非常に大きいことを認識した。

以下、手順としては、まず *The Pacific* と WBMP との関係について簡単に説明し、次いで *The Pacific* の号数順の時系列で、スタークウェザーが女性宣教師となって出国する前後 3 年間の出来事を中心に紹介して行きたい。具体的には、①彼女が Woman's Board of Missions of the Interior (以後 WBMI と略す) を通して American Board of Commissioners for Foreign Missions (以後 ABCFM と略す) に宣教師志願を申し出たが、最終的には WBMP が支援を引き受けた経緯、その結果、②二つのウーマンズ・ボードで開催されることになった歓送迎会の模様、③スタークウェザーの宣教師となる資質に関する証言、最後に④日本語の勉強を開始した時の状況に

について、これまで知られなかった（あるいは、間違っただけで伝えられてきた）事実を巡っての資料紹介をしたい。

1 *The Pacific* と WBMP との関係

〈*The Pacific* 上に定期的にコラム欄を与えられた WBMP〉

The Pacific の創刊号は未見であるが、San Francisco Theological Seminary で教鞭を取っていた Clifford M. Drury によると、*The Pacific* とは、1851年8月1日に創刊号を出版したカリフォルニア州で最初の、キリスト教をテーマとする週刊新聞である。最初の編集者は Rev. J.W. Douglas・Rev. J.A. Benton・Rev. S.H. Willey・Rev. T.H. Hunt の計4名で、主としてサンフランシスコ市で出版され、購読料は年間8ドル。創刊号の論説欄では、スポンサーは特定の宗派の機関紙となることを目指すのではなく、「宗教と教育という重大事」に貢献すると誓約していたことを紹介し、この新聞のコラムは初期のアメリカ西部の歴史全体の状況に様々な角度から光を投ずるものである、としている。（*Pacific Historical Review*, Vol.9, No.4, 1940. pp. 463-4.）

そのような歴史を持つ *The Pacific* 上に、WBMP の年会報告が初めて掲載されるのは Vol.24, No.43（1875/10/28）である。幸運にも、それを機に次号（1875/11/4）からは毎号定期的にコラムを持つようにと *The Pacific* の編集局から申し出られた。それは、WBM がすでに *L&L* という強力な機関誌を発行し、組織を固め、伝道活動を活性化しているのを見て、同じ西海岸の同志として WBMP を応援したいと思ったのであろう。WBM の機関誌として *L&L* が 1869 年に発行された時点では、WBMP はまだスタートしていなかったし、1873 年に WBMI から独立して活動を開始して以後も、他の二つのウーマンズ・ボードに比べて、活動の範囲がまだ小規模だったのである⁽⁴⁾。

WBMI から別れてスタートしたばかりの WBMP が、組織としての活動

を円滑に行うためには、下部組織である「部会」(Woman's Missionary Society:各教会に一つずつあることが理想⁽⁵⁾) に対して、①「WBMP『本部』の月例会の報告、②派遣女性宣教師の情報(主として書簡)の共有、③本部と部会、および部会同士の連帯の強化」が必須だったからである。それ故、各部会に対し、「*The Pacific* の定期購入」が勧められている。

〈*The Pacific* 上における WBMP 最初の記事〉

こうして、*The Pacific*, Vol.24, No.43 (1875/10/28) に WBMP の記事が初めて掲載されたのは、1875 年 10 月 6~7 日、サンフランシスコの Plymouth Church の地階集会所で開催された第 2 回年会についてである。ストーン (Mrs. A.L. Stone) 会長を始めとして、副会長・記録係・国内および海外幹事等々が選出された後、海外幹事のヘンショー (Mrs. S.E. Henshaw) が、当日の記録係りに指名されたので、今、*The Pacific* の読者にお知らせするという書き出しで始まる。

この年会で報告されたのは、1873 年、「WBM の中では一番遅くスタートした WBMP」が、1874 年に「めでたく第 1 回年会を開くことができた」こと、1875 年 10 月に行なった第 2 回年会までに年間 11 回の会合を持ち、出席者の平均は、前年の 18 名に比べて漸増の 22 名であったが、参加者は殆どサンフランシスコとオークランド在住者であったこと、などである。そして、「[WBMP が] 校舎建築費として 500 ドルの寄付援助をした神戸ホームのタルカット (Miss Eliza Talcott)」、「トルコの女学校と関係して教えているラップリー (Miss J.A. Rappleye)」、「メキシコで活動しているワトキンズ (Mrs. Watkins)」からの手紙が読み上げられた。

さらに「今はまだ WBMI と協力して、という形をとっている段階」であるが、WBMP はすでに「独立した法人組織」であり、「寄贈および遺贈による金銭の受託を受けることも、集まった資金を基金として自由に使用することも、法的に認められた団体である」という事実が強調されている。

今回、*The Pacific* 中のスタークウェザー記事を見直す作業の中で、WBMP 当局が独自で出版している年会報告・年史などに加えて、*The Pacific* が、WBMP の歴史記述に大切な第一次資料であることが判明した。それは、週単位のリアルタイムで記述された大変貴重な資料だからである。

なお、投票によって、ヘンショーが記者として毎週記事を書くことに決まったのであるが、毎週このコラムを埋めるには、相当の筆力が求められたことであろう。

2 *The Pacific* に登場するスタークウェザー関連記事

〈WBMP がスタークウェザー支援を決めた経緯〉

さて、WBMP に関連してスタークウェザーのことが *The Pacific* で取り上げられた初出は、Vol.24, No.45 (1875/11/11) である。11 月例会 (15 名が出席、会場は「いつものストーン牧師の教会の地下ホール」) の席上で、国内幹事のブレイクスリ (Mrs. S.V. Blakeslee) が WBMI の書記グリーン (Miss M.E. Greene) からの書簡を読んだところ、その中に「宣教師になる希望を抱いている若い女性スタークウェザー」に関する記述があった。そのため、「WBMP が彼女の支援をするか否かが議論された。結果的に NO となった。なぜなら、この時点ではまだ、地元カリフォルニア出身の宣教師 (1 人以上) をもうすぐ支援できるかもしれないとの希望があったからである。」

その流れが変わるのが、次回 12 月の例会であった (*The Pacific*, Vol.24, No.49 1875/12/9)。場所はいつものストーン牧師の教会 (First Congregational Church of Oakland) の広間で、約 15 人の会員が集まった。ストーン会長が欠席だったので、国内幹事のブレイクスリが司会をし、いつものように聖書朗読、賛美歌斉唱、前回記録の承認が行われた。そこで、前回 *The Pacific* 上で報告された記録に 1ヶ所だけスタークウェザーに関して修正を行う提案がなされた。以下が、その席上の様子である。

スタークウェザーって誰？ 25 歳くらいの若い女性で、生まれはコネティカット州ハートフォードだが、現在はイリノイ州ジャクソンビル在住で、最近献身して宣教師を志願し、近く日本へ旅立つ。出立の途次、約 1 ヶ月後に当地に立ち寄る予定。WBMI より、私たちのボードで彼女を支援することが提案され、11 月の例会で話し合われたが、決断に至らなかった。以下の記事で明らかのように、この問題は先週の水曜日に再度取り上げられ、彼女を支援することが決断された。

[先月の] 議事録を承認した後で、ブレイクスリによって、WBMI の書記ポロック (Miss Sarah Pollock) から WBMP に対する興味深い書簡の紹介があった。内容は、今まで部分支援だったメキシコのワトキンズを次年度からは WBMP の全面支援に変えることが出来るだろうということ、中国の Bridgman School に関しては部分支援のままとすること、支援金は、ワトキンズが 600 ドル、中国の学校が 400 ドルで総額は計 1000 ドルというものだった。するとすぐさま、聴衆の 1 人から、「全部で 1000 ドル！ 私たちにはもっと出来るはずよ」の声が上がると、すぐに「宣教師 1 人の支援のためにはいくら準備すればいいの」と別の声が質問。その答えが約 600 ドルとわかると直ちに「では、スタークウェザーを支援しましょう」との動議が出され、動議支持の声と共に周りは熱狂の渦に包まれた。「日本へはサンフランシスコ港からよ」「もう直ぐここに現れるのだから」「皆でお迎えしなくっちゃ」の声が後を絶たず、「私たちの宣教師」を迎えるための歓迎会の計画が次々と出て、一同喜びにあふれた。

〈WBMI による歓送迎会〉

一方、スタークウェザーを送り出す側のイリノイ州の様子について、L&L から引用する。タイトルは“Farewell Meetings in Elgin, ILL., and Chicago”で、2月10日と17日の2度にわたって行われた送別会の模様

が記されている。(L&L, Vol.6, No.4, 1876/4, pp. 125-6.)

- ① [スタークウェザーのための] 2月10日の送別会はイリノイ州エルジン
の教会において公開で行われ、多くの人から送別と祝福が贈られた。
スタークウェザーはこの地に住むようになって僅か2年だが、クリス
チャンとしての活動と類まれな人格で、教会外の人にも愛されていた。
そのことは、ここに集まった大勢の人、優しい気持ちのこもった礼拝、
お別れの言葉と共に流された多くの人の涙で証明される。スタークウェ
ザーが向かう日本には、同じ教会出身のダッドリー (Miss J.E. Dudley)
がおり、デイビス (Rev. J.D. Davis) 夫妻と ドーン (Mrs. E.T. Doane)
[デイビス夫人の姉] が近くに住むとのこと。

- ② [スタークウェザーと、同じく日本で働くバロウズ (Miss M. J. Barrows)
とレビット (Rev. H. H. Leavitt) 夫妻のための] 2月17日の集会は、
シカゴで行われたミッションの送別会であった。パートレット教授
(Prof. S.C. Barlett) の開会祈祷に始まり、バロウズの推薦者であるハイ
ド牧師 (Rev. Prof. J.T. Hyde) の祝辞、ハンフリー牧師 (Rev. Mr. S.J.
Humphrey) による日本ミッションの働きについての簡単なあいさつが
あった。次いで現在イリノイ州エバンストンで、帰国後は牧師を目指し
て教育を受けている澤山 [保羅] のスピーチがあり、WBMI を代表し
てスミス会長 (Mrs. Moses Smith) の送別の辞、そして最後に、パー
ットレット牧師 (Rev. W.A. Bartlett) の祝辞と続いた後、懇親会となった。

以上が、L&L からの記事であり、WBMI の送別会の模様である。

〈WBMP によるスタークウェザーの歓送迎会〉

ここで再び *The Pacific* に戻って、WBMP 関連のスタークウェザー記事

の紹介をする。1876年2月例会にWBMIから届いた手紙により、スタークウェザーのサンフランシスコ出航が3月1日と判明。その日はWBMPの月例会の日なので、急遽、例会を1日前倒しして、2月29日開催と決定。その結果、スタークウェザーが正真正銘、WBMPの支援下に置かれるのは1876年2月29日にサンフランシスコで行われたWBMPの歓送迎会から、となる。

記事が掲載されるのは *The Pacific*, Vol.25, No.10 (1876/3/9) 上であり、普段は1ページで終わるコラムが、今号は次ページにわたって書き連ねられている。WBMPのスタート以来初めて「私たちの宣教師」スタークウェザーを引き受け、2月29日に初めて対面し、翌3月1日には日本へ送り出した、その1週間後の記事になる。

レビット夫妻、バロウズ、スタークウェザーの一行は、シカゴから陸路をかってサンフランシスコに土曜の夜に到着した。スタークウェザーは太平洋岸アメリカン・ボードの代理人であるフリント氏 (Mr. E.P. Flint) の、オークランドにある家に迎えられた。翌日曜は安息日の休息を取り、月曜夕に the First Congregational Church のパーラーで、スタークウェザー一行の歓送迎会が開かれた。

記事には、WBMP全員が大慌てして準備している様子、相次いで開かれた特別な一大例会の様子が詳しく報告されている。

2月29日の例会は、ストーン博士の教会で10時半から行われ、年を含めても一番多くの人数が集まった。この重大な会に部会代表者の多くが参加していたことは大きな喜びだった。いつも通りに礼拝を持ち、種々の報告後にスタークウェザーの挨拶が求められると、会衆の関心は最高に高まった。彼女が立ち上がって誠実に簡潔にWBMPとの関係を語り、皆様が魂の救いのために末長くお働きくださいますように、そして、ここにご出席の皆様が私の進もうとしている生涯の働

きのために祈り続けてくださることを願いますと述べたとき、多くの出席者は母の娘を思う気持ちで一体となり、キリストの奉仕のために全身を献げようとしている若い娘に対して、会堂は言葉にできないほどの思いで満たされた。午後は、ストーンの教会の婦人たちによって用意された祝祭に総勢 100 人を超える人々が感謝して食卓についた。

また、スタークウェザーの雰囲気については、次のような描写がある。

人生の春の明るい光の中で、彼女は出立します。彼女が聖なる神殿に捧げようとしているのは、砕かれた希望でも、失意の人生でもありません。恵みにあふれた期待と可能性と共に、溢れんばかりの若さを祭壇に捧げているのです。

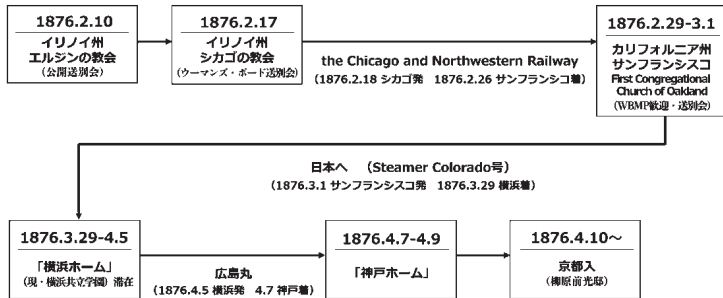
上記の、実に敬虔な彼女の描写に続いて、「29 日の例会に出席するために遠くから出てきた、私たちの中でも風変わりな田舎者の助任司祭」が、「おやまあ、なんと可愛らしい！これまで女性宣教師を見たことはなかったけれど、結婚しなかった女性というのはみんな、当然オールドミスだろうと思っていましたよ！」というコメントを載せたヘンショウの意図は奈辺にあったのか。その後さりげなく私たちの言いたいことは「ボードの仲間がお金を集めて、彼女の写真を撮っておき、部会に送りましょうよ。そうすれば、上品で表情豊かな『私たちの宣教師』の顔を皆に覚えてもらえるでしょうから」と続けている。

今号の *The Pacific* の記事は、「WBMP スタート以来 4 年間で、先週の火曜日、2 月 29 日のような例会を持ったことがあったらどうか」で始まる。そして、その日の「深い感動」「熱誠の祈り」「真情に触れた情緒、いや涙」は到底書き表すことはできない、「WBMP は今日から新しい世紀に入った！」「WBMP がこれまでして来たことは [宣教師支援事業の] 補助でし

かななかったが、今や3人の宣教師を自分たちのものとして引き受ける一人前のボードとなったのだ！」と誇らし気に語っている。こうしてスタークウェザーがWBMPの最初の娘として採用された時は、まさにWBMPにとっても忘れることのできないスタートの時となったのである。

〈イリノイ州から京都までの道のり〉

以下の図は、*Evening Post* 等の新聞記事や *The Japan Weekly Mail* の船舶情報などによって裏付けられたスタークウェザーのシカゴから京都までの行路情報である⁽⁶⁻⁸⁾。



〈行路情報は八木谷涼子氏提供〉

〈横浜港到着後〉

L&L, Vol.6, No.7 (1876/7, p. 221) によると、スタークウェザー一行は3月1日にサンフランシスコを発ち、「快適な船旅ののち」3月29日に横浜に着いた。グリーン夫妻に迎えられてレビット夫妻はグリーン家に、パロウズとスタークウェザーは横浜ホーム〔創立者プライン夫人 (Mrs. M.P. Pruyn) によって知られる現「横浜共立学園」〕に分かれて、約1週間の横浜生活を楽しんだ。4月4日付けの手紙で、スタークウェザーは次のように書いている。「先日の日曜日、横浜海岸教会の礼拝に出席。二つの意味で忘れがたい礼拝となった。一つは日本で初めての主日礼拝だったこと、

もう一つは日本政府が日曜を休日とすると布告した最初の日曜だったから。この喜ばしい一致により、日本最初のプロテスタント教会、横浜海岸教会の鐘の音が、その日の朝初めて歓迎のベルを響かせた。」

〈スタークウェザーがアメリカン・ボードに提出した宣教師志願書と推薦書 2 通〉

The Pacific, Vol.25, No.17 (1876/4/27) は、“Our Youngest” というタイトルで、前年 10 月にスタークウェザーが WBMI を通してアメリカン・ボードのクラーク幹事 (Dr. N.G. Clark) 宛に提出した宣教師志願書と推薦書 2 通を紹介している。2010 年すでに拙著の中で要約の形で記載している⁹⁾が、幼い頃から育んだ純粋で喜びにあふれる彼女の信仰が具体的に読み取れるので、引用部分を増やして紹介する。

ヘンショウの記事では、「最近、スタークウェザーの宣教師志願書が本部で読まれ、たいへん興味深かったので、このコラムを通して、部会の会員にも紹介することになった」とあり、文書は全部で 3 通。1 通はボストンのクラーク幹事に提出した「宣教師志願書」、2 通目と 3 通目は、それに添えた推薦書である。推薦書の 1 通は、ハートフォードの教会学校のブラウン教師 (Mrs. Roswell Brown) から、もう 1 通は、エルジンの教会のディキンソン牧師 (Rev. C.E. Dickenson) のもの。2 通とも、「スタークウェザーの信仰生活に関する大切な証言 (testimony)」である。

特に「それまでの彼女の生活のスケッチであるだけでなく、飾らぬ口調で全体の調子が澁刺とした喜びに溢れている文章なので、読む者の気持ちが『犠牲感』というよりも『溢れんばかりの活気と快活さの気分』に高められる」と推奨されている。

エルジン (イリノイ州) 1875 年 10 月 30 日

N.G. クラーク様

WBMI の幹事様の指示に従って、日本への宣教師志願書を提出いたします。

私は 1849 年 8 月 3 日にコネティカット州ハートフォードで、信仰深い両親の下で生まれ、幼年から当地の the Central Church の教会学校に入り、23 歳までその教会に皆勤で出席しました。

11 歳で Hartford Female Seminary (以後 HFS と略す) に入学し、5 年コースで学び、1866 年に卒業しました⁽¹⁰⁾。

最高に愛情あふれる宗教的感化を、家庭と教会と教会学校から受け、1864-65 年の冬に起こったリバイバルの時期に、「イエス・キリストの中に、私のための人格的で尊い救い主」を見出しました。その後は、私のために全てを働かれるイエスに対して、自分は十分に役割を果たしていないと感じ、文字通り新しい歌「私はいつも幸せ。心は喜びの歌を歌っている。なぜなら、イエス様は私の罪を許してくださったのだから、どうしてこの喜びを歌わずにいられましょうか」を口ずさみながら、証の生活を送っています。

回心以来最高の楽しみは、イエス・キリストについての私の理解と心からの共感を他の人に伝えることとなり、私の心から出る言葉は真正銘「私に魂を与えてください。さもなければ死を」となりました。

早くから若い仲間の中に、私の「働き場」を見出して来ました。そして 18 歳の時に、男子生徒が 5 人いるクラスの正規の教師に任命され、5 年間務めました。ある時は生徒数が 19 人に増えました。その中から教会に行く人が増え、今も熱心にキリストの教えに従っていると聞いています。私はまた、ミッションの教会学校の先生もしていました。1874 年に一家で西に移動し、エルジンの the First Congregational Church に出席するようになり⁽¹¹⁾、ここでも主のために働く機会に恵まれ、喜んでその特権を自由に駆使して来ました。

これまでもしばしば、私の持てる力全てをキリストのご用のために

捧げたいと願っていましたが、時折、国内または海外派遣の伝道師になりたいと強く惹かれるようになり、「イエス様、私の手を取って、あなたの御用に導き入れて下さい」とひたすら祈りの声を上げ、神の導きを信じて待つておりました。

近年、兄と一緒に ABCFM の会合に何度か出席していましたが、その時に感じたワクワク感が私を離れることはありませんでした。何と言ったらいいのでしょうか、ここ数ヶ月間、日本からの招きの声が私の耳を離れない状態になりました。それで友人たちは私がシカゴの年会⁽¹²⁾に出席したら、もう行ってしまうのでないかと心配するほどになりました。

その会合で、今からでもいい、「もう一人宣教師を」「誰か召命に応じる人はいませんか」と熱心に訴えられた時、「はい、ここにいます。主よ、私をお遣わしてください」と申し出たかったのです。しかし、まず故郷に帰って、私と故郷とのつながり、私の願望をきちんと伝えてからでなければ、とっていました。時が経つにつれ、親愛なる友人たちが感じていた、私の願望に対する当然のためらいも克服され、クリスチャンにふさわしい同意を与えてくれました。さらにこの分野でキリストのために働きたいという私の願いを黙認してくれるようになりました。こういう次第で、私は宣教師として志願し、必要な手続きを経て、今こうやってお手紙をお送りしています。ここに健康診断書と教会籍の書類を同封いたします。

敬具

次に、ハートフォードから送られてきた、スタークウェザーの最初の教会学校のブラウン先生からの推薦書を紹介する（推薦書2通は、WBMI 幹事グリーンからの依頼に対する返信）。

ハートフォード (コネチカット州) 1875年10月18日

M. E. グリーン様

スタークウェザー嬢のような貴重な女性を女性宣教師として確保されたことは大変幸運であるとお考えください。彼女は幼い時から教会学校のクラスに入ってきて、極寒の冬も酷暑の夏も、2人のお兄さんと一緒に2マイルの道を歩いてきました。彼女が一番年下の私のクラスを卒業してからも教会で会うことが度々ありましたが、生徒としても教師としてもよく知っております。いつも誠実、従順、礼儀正しきの点で目立っていましたし、実際、申し分のない生徒でした。

ご家族が数年前に同市の北のほうに移られてからはお会いする機会が少なくなったのですが、スタークウェザー嬢のお名前が出るときにはいつも、無条件の褒め言葉が付いていました。

数週間前のことでしたが、スタークウェザー嬢のお家の近くにある「配偶者を亡くした女性のホーム」に住んでおられるご婦人が、大変関心を持って彼女のことを語っておられました。彼女のクリスチャンとしての性格がどれほど愛らしいか、今はいなくなってどれほど淋しいかを。

スタークウェザー嬢は大変評判のいい女学校⁽¹³⁾の卒業生なので十分に教養があり、教会学校の先生としてもクラスの愛と注目を惹く人でした。

お母上は古式豊かなニューイングランド風の美しいクリスチャン女性の典型で、幼い頃からの行き届いた家庭での躾が将来の伝道と自己犠牲の生活の準備期間だったのでしょう。海外伝道師として彼女以上にふさわしい人を私は知りません。

まだ時間と機会を頂けるなら、もっと多くの証言を、特にスタークウェザー先生から優しい言葉や、クリスチャンらしい愛情いっぱい的心づかいを貰った教会学校クラスの生徒から得て、もっと多くのこと

が書けると思います。でもこれだけでもご要望に十分お応えできているのではないのでしょうか。

WBM のハートフォード部会の年会は明日ここで開かれます。いい会になると思います。これ以上の情報がお入り用でしたら、喜んでご準備いたします。

敬具

この紹介状については、ヘンショーの言葉で、「彼女のことを幼時から知っておられる方からの最高の証明であり、十分納得させるものである。冬の寒さ、夏の暑さを物ともせずお兄さんと一緒に教会学校に通わせた、ニューイングランド・タイプの母親の家庭内での躰は非常に興味深い。このお兄さんの一人が、彼女自身の手紙に書いてある通り、シカゴの年會にご一緒されたのだろう」というコメントが添えられている。

最後に、同じくグリーン幹事の要請に応じて、イリノイ州エルジンの会衆派教会ディキンソン牧師から送付された推薦書を紹介する。

エルジン、1875 年 10 月 19 日

M. E. グリーン様

公式の調査書を受け取りました。

スタークウェザー嬢は 1 年と少しエルジンに住んでおられ、その期間中、私たちの教会のメンバーです。まだあまり親しくはありませんが、度々お会いしています。あらゆる面で好印象を受けています。すぐにクリスチャンの働き手として皆の間でよく知られるようになりました。教会から 1 マイル離れたところにお住まいですが、いつも礼拝には出席され、月曜夜の青年会にも出席しておられます。青年会では重要な役割を担われ、彼女の発言や祈禱はいつも適切で、洗練された

お人柄と教養あるクリスチャンであることが分かります。

教会学校も1クラス担当しておられますが、大変立派な先生だと思っています。この他に、お住まいの近くで、地域の恵まれない子供たちの中で日曜学校を開いておられます。彼女の他にも積極的に協力している人はいますが、彼女が責任者になっていると思います。そこには50~60名の生徒がおり、この界限では大きな学校です。数日前には近隣の祈祷会に出ていると聞きました。歌うこともオルガンを弾くことも大変お上手で、遠慮深く寡黙な方ですが、宣教師魂は十分に持っておられます。

また他の方とも協調して働ける方だと思います。ただし私にはまだこの点を判断できる資格が十分にありません。しかし、私の知る限りあらゆる点で、志願しておられる宣教師の働きに十分適応できると推薦することをためらう気持ちは毛頭ありません。

貴ボードは若い女性方を募集しておられるのだと思いますが、選ばれた方に関しては私どもからも、祈り祝福させていただきます。

敬具

ヘンショーは、以上が“our youngest”の証明であり推薦状であると括っている。

〈スタークウェザーの日本語学習について〉

最後に取り上げるのは、スタークウェザーの日本語学習についてである。

まず、*L&L*, Vol.6, No.10 (1876/10, p. 309)の“Japan. The Opening Work in Kioto.”というタイトルの記事である。これは、1876年5月10日付の、イリノイ州カントンに住む婦人に向けた手紙の抜粋であるが、その中で、スタークウェザーの日本語学習に関する箇所だけを紹介する。

5月2日に、新島氏（Mr. Neesima）を教師として確保し、毎日レッスンを始めました。私が日本語で最初に覚えた言葉は「ありがとう（aragota）」すなわち“thank you”なのですが、日本についたばかりの時に、江戸の海岸で小さな手いっぱい貝殻を持って来てくれた子供たちに言った言葉です。この子たちに大切な「イエス様のお話」を即座に出来る日がどんなに待ち遠しいことでしょう。

この記事については、あの忙しい、しかも校長職にある新島襄が、スタークウェザーの日本語教師を引き受ける時間があつたのか、と以前から不審に思っていた。ところが、それよりも2ヶ月前の *The Pacific*, Vol.25, No.31 (1876/8/3) には、“Pleasant News from a Far Country” という記事の中に、京都ステーションの年会報告の一部と一緒に送られてきたスタークウェザーからの手紙の紹介があつた。ここでも、日本語学習に関する部分のみを引用する。

昔から言われている「ゆっくり急げ」という戒めに従うこと、特に始めのうちは現地語の勉強に深く関わらないでおこう、という深い決意にも関わらず、もう待ちきれなくなって、5月2日に「お八重さん（Mrs. Neesima）」から、最初の日本語のレッスンを受け、その日以来、毎日少なくとも3~4時間勉強をしています。

L&L と同じ、5月2日という日時で、「お八重さん（新島夫人）」と名前入りではっきり記述されていることから、スタークウェザーの最初の日本語教師は新島襄ではなく、新島八重であつたと考えられる。当時、*L&L* に記載される手紙は、別の人の手書きで筆写されて巡回されることも多く、筆写の回数が多いほど間違いが生ずる可能性は大きくなった。これに対して、*The Pacific* の場合は、月に1回、直接本人から

WBMP 宛に報告書として送られてくるものを記事にするのだから、時間的にも早いし、間違いも少ない情報だと言える。

スタークウェザーの日本語学習についての報告に対して、*The Pacific* の記事にはヘンショウのコメントが付されている。「1日3~4時間は大変な勉強」であり、「私たちにとっては厄介で困惑させる、とまでは言わないものの、非常に難解に思える東洋の言語学習に向かって、彼女がこれほど果敢に勤勉に取り組んでいることを思うと、以下に述べられているスタークウェザーのコメントは本当の気持ちだと信じていることができる」と。

確かに、特に日本語学習の場合、勉強は労働を意味します。さらに日本語教師は、彼らがどれほど善意を持っていたとしても、いわば、どのように教えるかを教えてもらわなければ [原文イタリック] いけません。学ぶ側の人自分が自身自身のレッスンを全て計画し、教えてもらいたいことを相手に求めていかなければならないのです。それも、学習者は教師の言語を全く知らず、教師も学習者の言葉をほとんど知らないという状況の中で、です。多分、このことが一層、この言語を学ぶ魅力を増すでしょう。実際、私はすでに、他の言語を学ぶ場合と同様に、日本語を学ぶ魅力を感じています。

スタークウェザーの日本語教師に対するコメントは、実際の日本語学習の現場を想像させて大変興味深い。当時の日本人の中に、外国人への日本語教授法を身につけていた人がどれ程いただろう⁽¹⁴⁾。いわゆる日常会話的なものを、その状況に応じて覚えていく、というのが一般的であったのでないだろうか。それは、スタークウェザーがHFSで、ドイツ語、フランス語、望めばさらにラテン語、ギリシャ語を、専門の外国語教授から学んだ経験とは大いに異なっていただろう。「恐らくそのことは、日本語学習の魅力を増すでしょう」と言いながらも、戸惑っていたことは想像される。

おわりに

今回、スタークウェザーの登場する *The Pacific* 記事から、WBMP と *The Pacific* のコラムとの関係が、歴史資料として非常に大切であることに気づかされた。また、このコラムを書き続けたヘンショー (Mrs. Sarah Edwards Henshaw) についても、もっと知ることが必要であろう。

さらに、日本在任時の7年間ではあまり言及されることのなかったスタークウェザーの側面が照らし出されたのではないだろうか。これまであまり語られてこなかった、若い頃からの伝道精神、純粋で、いつも希望に溢れ、恵まれない人を思いやり、そして多くの人から慕われ愛された、若き日のスタークウェザーの人物像が浮かび上がって来たように思われる。

(注)

- (1) 拙著『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校 (1876-1893)』(同志社女子大学史料室叢書Ⅱ 2010) ほか、スタークウェザー関連の口頭発表資料として。
- (2) 「米国伝道会宣教師文書—A.J. Starkweather 書簡—」1-4 (同志社女子大学総合文化研究所『紀要』第7-10巻 1990-1993)、「アメリカン・ボード宣教師文書—同志社女学校女性宣教師を中心として—〈スタークウェザー—書簡—訳および注—」(同志社女子大学英語英文学会『Asphodel』第45-49号 2010-2014)、「同志社女学校初代婦人宣教師 Alice J. Starkweather—Christian Home School の実現のために—」(同志社女子大学総合文化研究所『紀要』第12巻 1995) ほかで紹介。
- (3) アメリカン・ボードを母体とする女性団体 (Woman's Board of Missions) で、教派別では、最初に1869年ボストンで設立された海外伝道団体である。同年、シカゴを中心にWBMIが、5年後にはサンフランシスコを中心にWBMPが結成された。3者は同じ憲章(法人規約)の下で活動しているが、土地柄により活動の特色は異なる。本文中、それぞれ独自の活動に関する記述の場合は、WBM, WBMI, WBMPと区別して書くが、一般的名称としてはウーマンズ・ボードを用いる。
- (4) *L&L* に 'Board of the Pacific' のコーナーが始まるのは、Vol.9, No.5 (1879/5) からである。それまでは 'Western Department' (Vol.2, No.1, 1871/3 から)、'Department of the Interior' (Vol.4, No.4, 1874/4 から) の中で扱われていた。
- (5) 2ヶ月後発行の *The Pacific* Vol.26, No.48 (1875/12/2) で、カリフォルニア州には会衆派教会が60あるのに、「部会」は、まだ1/3の教会で結成されているに過

ぎないことが嘆かれている。

- (6) 一行は、2月18日(金)にシカゴを出発し (*The Inter Ocean* 1876/2/22)、陸路でサンフランシスコへ向かい、8日後の2月26日(土)夕にサンフランシスコに到着した ('Overland Passengers' *Daily Evening Post* 1876/2/26)
- (7) 3月1日(水) 正午サンフランシスコ発の Steamer Colorado 号で出帆 (*Daily Evening Post*, 1876/3/01)、3月29日(水) 横浜着 ('Shipping Intelligence.' *The Japan Weekly Mail* 1876/4/01)
- (8) 4月5日(水) 横浜発の広島丸で出帆 (*The Japan Weekly Mail* 1876/4/8)、4月7日(金) 神戸着 (*The Japan Mail* 1876/4/25) (以上、6)~8) は八木谷氏提供の情報)
- (9) 前掲『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校 (1876-1893)』pp. 9-10
- (10) 当時、それほど厳密に満年齢で数えていたか否かは不明であるが、彼女の満11歳は1860年8月3日から61年8月2日である。学校は9月始まりであるので、11歳になってすぐの1860年9月入学とすれば、66年卒業までは6年間在学したことになる。HFSの学則によると、正式の過程は普通科5年であり、1866年、5年コース卒業生の中に A. J. Starkweather の名前は確かに記載されている。従って、正式のコースに5年間在籍し、そこを卒業したHFSの卒業生であることに間違いはないが、その前に、1年間予備科でも学んだのかもしれない。
- (11) Elgin の First Congregational Church に問い合わせ、スタークウェザー一家 (アリスと両親) の転入会は1874年10月31日と判明。
- (12) 1875年10月7日にシカゴのメソヂスト教会で開かれたWBMIの第7回集会のこと。その席上で、神戸ホームの建築費3000ドルを1年前に誓約して集めていたが、4ヶ月前に6000ドルに値上がりしたことが報告された。すると、すぐさま、WBMPから1800ドル、日本人から800ドル、さらにいくつもの国内伝道支部が25ドル負担を申し出たので、資金面は解決されたこと、しかしまだ一つ足りないものが、「もう一人宣教師を！」の要請だと記録されている。そして、そのページの下段に「翌日、イリノイ州スタークウェザーが応じて、現在日本へと認可中」との注書きがある。これで志願文中の文言が裏づけられる。(L&L, Vol.5 No.12 (1875/12, p. 371))
- (13) Hartford Female Seminary のこと。
- (14) アメリカン・ボード宣教師の日本語教育に関しては、①竹本英代「宣教師の日本語教育—1890年までのアメリカン・ボード宣教師を中心に—」(同志社大学人文科学研究所研究叢書37『アメリカン・ボード宣教師—神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869~1890年』教文館 2004 pp. 359-387) と、②同「宣教師の日本語学習—アメリカン・ボードの場合」(『キリスト教史学』第63集 2009

pp. 180-193) が参考になる。そこでも触れられている通り「アメリカン・ボードの宣教師は、来日後、日本人から日本語を個人的に学ぶ」のが通常の形態であり、「アメリカン・ボードで、個々の宣教師の日本語学習を日本ミッションが統括する」方針が変わるのは1882年の年会以降のことである (② p. 181)